

中部地方随一の老舗画廊、名古屋画廊は、初代の中山一男氏が名古屋初の「近代画商」となつて今年で七五年となる。浮き沈みのはげしい美術業界にあつて、常に中部地方の美術業界をリードしてきた名古屋画廊。中山真一社長に今後の展望について聞いた。

——創業七五周年ですね。

中山 七五年間の総括という意味もあつて昨年『愛知洋画壇物語PARTII』（風媒社）を刊行しました。郷土にとつて重要な洋画家五七名をとりあげたのですが、とりもなおさず、多くは私どもの関係作家です。八つの新聞や六つの美術雑誌での紹介、それに亡父や私の母校の『早稲田学報』に「これまで書かれたことのない近代史」など思つてもみなかつたような書評が掲載され、墓前によい報告ができました。

——七五年の歳月は、どんな歴史でしたか。

中山 つぶれなくてよかつた、と実感される年月です（笑）。戦中、戦後、平成不況。そもそも私どもは不況期をベースに経営をし

てきたものの、リー

マンショックや大震災後などさすがに想定外で、個人・法人・美術館という私どもの顧客三本柱がどうなることやらと。結果的には赤字の年は一度もありませんでした。お客様はじめ、ひたすら感謝をいたしております。

リーマンショッ

ク直後、社会全体が沈んだ雰囲気がありました。こんなときこそ絵で世の中を明るくしたいと思ひ、東海地方各地

中山 真一社長インタビュー

を迎える名古屋画廊 周年への展望を語る

の文化施設へ出向き、私どもの所蔵作品を使用した「移動美術展」を開始しました。今年で九年目になります。年に数回各地で行っています。実際には、いつも一番わたし自身が展示作品から大きな励ましを受けています。社員たちもこの間によく成長しました。

——一〇〇周年への展望についてはいかがでしょう。

中山 日々のビジネスなどを通じて、画廊コンセプトをひたすら磨きあげ、美術界からひろく社会に貢献できればと願うばかりです。美術は、いつの世にも人に「生きる歓び」、さらには「生きる勇氣」を与えるものでしょう。しかし、浮世絵などの伝統をもつわが国でありながら、今そこまでの状況はありません。美術と社会の回路がふさがっているように思えます。そこを積極的に変革するような仕事をしていきたい。古いものにせよ、新しい作家を育成するにせよ、よき美術によつて人や社会に潤いや、逆にインパクトを与えたいと思います。

——その実現については。